僕がはじめて桜井のような日本人に出会ったのは、日本人がヨーロッパ人やアメリカ人をあこがれて、日本人は日本人自身の文明的未発達な姿を自己嫌悪し、日本人の全てのものをトランプの全カードを取り変えるように放棄してまでも西洋人に変身したいものだと高度成長のスタートをきった60年のはじまりの頃である。

人間並に生きることも、革命的に芸術を表現することもその頃の日本人にとって、自己の劣等感や出生やをいかにすばやく切り捨ててしまって、西洋人的自由の幻想に投入できるかということだけに未来の希望があって、僕も名古屋から逃げるように東京にやってきた頃だった。19××年に、彼は巨大な布団カバーのような「布」を持って東京の内科画廊にやってきて、会場の全体に洗濯物でも干すように布袋を何列もぶらさげた。うす汚れた色の布には何百個もボケットがついており、その袋から米の稲で作られた「ワラ縄」がはみ出ていた。このとき彼は個展を発表するためだけではなく、シリーズとして何人かの仲間と一緒に「九州派」を提示するためにやってきた。彼の大風呂敷はまるで日本の太古がそのままつめ込まれそうな土着の色をした九州が入っており、その九州派のポケットのなかに、米の種子を切り取られて老枯した植物であまれる、細長きペニス状になった「ワラの縄」にされた東京のアバンギャルド作家達がうなだれてはみ出しているように見えてきた。このときの東京は大地の全てをコンクリートでおおいガラス張りの墓石のような建物をたてていた。そんな近代的な建物の壁面にかざれるような作品を作ることが前衛アーチストになることだと信じきっていた僕の目の前で、彼は東南アジアの色をした野蛮な九州の布のなかに「東京の現代作家達の首つりの姿」をボケットからわざわざはみ出させて見せているのだろう、と思ってしまったからである。

芸術表現とはいかに他人がやったことのない独自なオリジナルな僕一人だけの世界を提案することだと思っていた僕は恐ろしい衝撃を桜井の作品に感じてしまった。なぜなら彼の表現するのなかに「僕の自画像」が映されていたからだ。僕の姿が僕の表現する絵布のたかになかなか見つけられなかったのに、僕の姿が「九州派の布のボケット」のなかに発見されたショックは、何か、とほうもない長い時間の記憶喪失していた次元からいきなり呼びもどされたような気分と、悪夢から覚めたあとの気恥かしい思いにさいなまれているクラクラした実感とであった。

つまりアーチストとは、彼自身の表現のなかに「我々のような俗物の不可視だった正体」を鏡面化して映している者のことをいっているのだ、ということが、その後に彼と出会いながらやっと理解できるようになった。たぶん桜井は彼自身を作品に表現しているつもりかもしれないが、僕自身が表現しようとしている僕の作品よりも桜井の作品を覗いたほうが、僕の現在いる位置や姿がより正確に客視されているのだから、いつも彼に出会うと「僕はなにを為すために、この日本という僻地に追いやられてしまった人間であり、桜

井だけが遠い外国から賭殺場にいやいや引きづられていく牛のような僕を視つめられるものなのか」という、そんな人間存在の始原的な動機を問われ、ゆすぶられてしまうように思うのである。